

〔巻頭言〕

藤井達也教授退職記念特集によせて

社会福祉学科長

岡 知史

藤井達也教授は、2006年4月に本学科に精神保健福祉を専門とする教授として着任され、2018年3月末に定年退職されるまでの12年間、社会福祉学専攻主任などをつとめられ、本学の教育・研究のために多大な貢献をされました。特に2012年度から始まった新しい精神保健福祉士養成課程では、精神保健福祉士養成課程にかかわる中核の教員として非常に多くの講義や演習に携わってこられました。日本の精神保健福祉の先進的実践を展開していた「やどかりの里」で実践経験を積んでこられた先生の講義と演習からは、学生たちは非常に多くの実践的な学びをすることができたと思います。また大学院教育では、社会福祉学専攻唯一の必修科目である社会福祉研究法基礎演習で「社会福祉研究法総論」を担当され、文字どおり研究方法を教育する課程の基礎を担ってこられました。このように教育者として実践的な教育から大学院での研究方法についての教育まで幅広く担当されていましたが、その一方で、藤井先生は国際的に活躍された研究者でもありました。イタリアの精神保健福祉の研究を深められ、2015年にはイタリア心理社会的リハビリテーション学会名誉会長、ロレンツォ・ブルチ先生を迎えての講演会を上智大学社会福祉学科の主催で行いましたが、これは藤井先生の深いイタリア研究の蓄積なくしては考えられないことでした。

私事になりますが、私が藤井先生と初めてお会いしたのは、おそらく30年以上も前のことであり、そのとき私はまだ学生であったように思います。学会か研究会の集まりで、藤井先生のほうから声をかけてくださり、すでに論文等でお名前が知られているかたでしたのに、私のような一学生に対して非常に丁寧な態度で接して下さったことを覚えています。ご縁があり、上智大学で同じフロアで働く機会をいただきましたが、藤井先生の学生への温かい愛情ある指導には、いつも感銘を覚えています。

藤井先生の学生に対するかかわりについて、ひとつ例をあげれば、教員間で個別の学生について話をするときに、私のような教員はつい「あの学生には問題がある」とか「ダメだ」とか、否定的な言い方をしてしまいがちなのですが、藤井先生はそのような言い方は決してされないのでした。そうではなく「あの学生には課題がある」とおっしゃるわけです。おそらく「問題」という言い方に含まれる否定的な意味合いを、藤井先生は避けられたのだと思っています。また「課題」は乗り越えることによって、よりプラスになるという意味があったのだと思います。教員の学科会議でも、いつしか「あの学生には問題がある」という言い方が、「課題が

ある」という言い方に変わったように思います。相手の人格を否定するようなことは決しておっしゃらない方で、学生だけではなく、教職員もまた何でも安心して相談できる方でした。

藤井達也先生のこれまでの本学科の教育と研究へのご尽力に感謝するとともに、今後のご活躍とご健勝をお祈りし、これからもご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます次第です。

追記

なお今年度より本学科の研究紀要は電子化し、オープンアクセス化をよりいっそう進める形になりました。これまでも大学の機関レポジトリからアクセスは可能でしたが、紀要そのものを電子化することによって、たとえば、デジタルオブジェクト識別子を付与された被引用文献には直接リンクを張るなど、新しい発想で紀要を編集していくことが可能になります。